

の分擔をきめて蟲取りを充分にする事にし
た。青蟲、夜盜蟲など毎日／＼取つてもど
りつくせない。五月に入るとどの葉も急に
まき出した。かつて幼稚園の丸花壇に十株
位キヤベツを植ゑた事があつたが、一つも
葉が巻かないで、葉牡丹の様になつた。こ
んな経験のもち主であるから七十近くのも
のがほとんどまるく葉が巻くので不思議な
様な氣もした。ほんとに夢の様にうれしく
なつた。土もよい、日當りもよい、苗もよ
い、手入もよい(これはどうですか)とにか
く三拍子揃つた結果であらう。こう順調に
生育して來ると、蟲取りは尙更おこたつて
はならない。東京邊の幼児はキヤベツと云
へば臺所にある丸いかたまりとしが考へ
ない。この偉大なる葉の中央にあのキヤベ
ツがついてゐるのかと始めて眼を見はつた
様であつた。

キヤベツの收穫

かたく巻いたキヤベツを先づ一つとつて
海の組の幼児たちにお辨當の時のお汁を作
つて食べさせた。鹽で味をつけお醬油はほ
んの色つけ位に入れた簡単なお汁であつた
がとにかく幼児たちは喜んでくれた。三杯

もおかはりして大喜びでたべてくれた。海
の組の幼児たちに試食してもらつて喜ばれ
たキヤベツ汁は次々の全園の幼児たちの晝
食のお汁として賑かになつた。幼児たち
を喜ばせた後、この三月卒業した保育實
習科の生徒さん達の勞も報いたい。六月二
十五日 皇太后陛下の御誕辰祝賀式は丁度
日曜日と重つた。園藝の大岩先生、名和さ
ん方にも御出席願ふ事として在京の卒業生
に案内を出し、キヤベツ料理をすゝめる事
にした。調味料は各自少量づゝ持參する事
にして、とにかくキヤベツの味噌汁、鹽も
み、いんげんの煮付など三種類のお皿盛り
が出来上つた。お料理の味は味そのむより

人形芝居雜記

戦局は如何に嚴しからうとも、こども達
の初春を待つ心には些かの曇りもなく明る
く輝かしい。暮から新春にかけて専ら家庭
の子として戦時下許される限りの楽しい和
かな毎日を送つた彼等を叔、私はどんな風

も自分たちが丹精したものとといふので何倍
かの美味を添へたのである。歸りには各自
キヤベツのお土産をもたせた。大小輕重い
る／＼あつたが收穫の時一つ一つ目方をか
けてその重さを計つたのであつたが八百匁
位が最高の出来であつた。専門家の一個二
貫目もあるものなどに較べれば問題にもな
らないわけであるがとにかく始めてキヤベ
ツを作つた素人としてはこれで一寸満足し
た。又七十株植ゑ付けたキヤベツの中一株
だけ始めに枯れてしまひ、三株ばかりが葉
牡丹の様になつた以外はみんな、とにかく
キヤベツらしく丸くなつた丈けでもうれし
いことであつた。

安村 ふさ

に迎へようか。どんな風にして喜ばせよう
か。かるたや双六を作つて遊ばせるのもお
正月らしく面白いが、子供達をてつとりば
やく喜ばせたい私の氣持は、先づ人形芝居
で、と思ひつく。こども達は人形芝居がと

ても好きである。どんなことでも喜ばないものはない。人形芝居上演の事が定るとその待ち焦れ様はいぢらしい程である。

扱、讀者の方々には人形芝居の玄人の方も多いと思ふが、新しく始めようといふ方に幾らかの御参考にもと思ひついた事どもを述べてみよう。

先づ舞臺であるが、私共の園では以前から専用の移動組立舞臺があり、数人の使ひ手が入つて人形を動かす事が出来る様になつてゐる。併し、今からでは到底その様なものは望めないから、めい／＼自分の周圍を見廻して工夫するのが早道である。衝立の上部を舞臺にするのは最も普通な方法であるが、衝立のない場合は戸や障子を横倒しにしても結構である。又單に細長い机の廻りを布で紙で覆ひ、その上でしても差支へないし、廊下と室の間の硝子窓の所等も利用し得る。尙オルガンがそのまゝ、使へる場合もある。そして極く簡単に背景なしでも素撲でよいが壁が屏風を利用して、それに貼り得れば効果は一層上る。背景は道のある野原の風景、森の中、庭、室内の場、海邊の風景等、極くありふれたものを

描いておくと、いろ／＼の場合に重寶に役立つ。尙紙がどうしてもなければ、黒板に(能舞臺式)全體に通ずる氣分を表した畫を描いておくのも一方法であらう。

扱、次に人形はどうすればよいかといふと、端布となるべく丈夫な紙を利用して作るのが手頃であらう。人形の頭は、顔の形に切つた二枚の布で作し、中に適當なつめものを固くし(指を一本入れる餘裕を残しておく)墨で目鼻、髪等を描く。此の下部に着物を着ける。着物は手の幅より稍く大きめの幅で手首邊までの長さの袋の形を原形とするのが最も簡單でやりよい。人形の手を兩端につけ、中に使ひ手の指が入る様にする。布の色あひはなるべくそのものらしいもので無地の方が印象的であるが、あり合せで構はない。又布が足りない場合には紙に彩色して布と同じ様に取扱つても結構間にあふ。人物でも動物でも以上の要領で頭部丈そのものらしく作ればよいのである。その他背景におく物はそのものらしく紙に描いて切抜くか立體的に作るかする。最後に脚本であるが、その製作には十分な注意を要する。讀んでみて、よく出来

てゐると思ひ、扱上演してみると大層工合の悪い場合がある。こゝで、人形芝居は一つの演劇であつて、劇はみる動作である等と尤もらしい言ひ方をしないで、動作による表現が主體となるものであるから、文章は其に適應して作られねばならない。そして童話を脚本化するに當つては幼児がよく知つてゐるものを選ぶのが大切で、劇的な要素を持つ部分を演出する様心がける。

尙、人形の使ひ方は、首に入れた指は大槪の場合固定し、兩手を絶えず表情をつけてゐる様に心を配つてゐれば、たとへ下手でも、人物が躍動してみえ、幼児は生あるものとみてくれる。

扱、脚本の一つを御参考までに掲げる事にしよう。

カチ／＼山

第一場 畑、

背景。大根やさつまいもの畑
登場人形、その他。

お爺さん、お婆さん、

狸 前述べの要領の袋人形の腹部に白い布を縫ひつけ中につめものをししてふくらます。

お日様、お月様〓何れも畫用紙で平面に、

わな〓一つ結んで環にした紐を舞臺の中央に置く。

——幕あく——

舞臺の右からお爺さんお婆さん出て来る。

婆「おや〓つ、お爺さん、又大根が抜かれてゐますよ。これはきつとあのいたづら狸の仕業に違ひありませんよ。本當にしようのない狸ですねえ。」

爺「うん、昨日は、わしが大事に〓にしてやつと實らせた葡萄をみんな食べてしまふし、今日は今日で自慢の大根を噛つてしまふなんて、あの狸奴、今夜こそはわなをかけて捕へてひどい目に會はせてやらう。婆さん繩を持つて置いて。」

婆「はい〓。」(右に引込み繩を持つて来る)「今度こそはうまく引つかゝる様なのを作つて下さいよ。」

爺「渡された繩は下に落し、臺の下の用盒の繩を持ち上げ(左)ほらこんなにいゝのが出来たよ、これならきつと引つかゝるだらう。明日の朝は早く来て、うんと怒らしめてやらう。」

(お爺さんお婆さん右に入る。此の頃よりお月様が昇り始める。左から狸が嘖つゝみしながら出て来る)

狸「スッポン〓 スッポンボン、スッポン〓 スッポンボン、

あーア、いゝお月夜だなあ、お爺さんの畑で今夜は何を食べようかな。一昨日の葡萄、おいしかつたなあ、おいしくつて

〓頬つべたが落ちさうだつた。それに昨日の大根も太くて本當においしかつたなあ、(少し進せ)おや、此はお諸だぞ、う

まそうだなあ、今晚は此のお諸をどつさり御馴走になるとしようかな。ムシヤムシヤ、ムシヤ〓おもしろいなあ、ムシヤ

〓(だん〓わなの方に進せ)おや、此れは仲々抜けないぞ(ミわなのわの中に手を入れる。透端に下から紐の兩側を引つ張るので結ばれてしま

あ アツ!! 痛い!! 手がぬげないよう。アーン〓 痛いよう〓。助けてくれ

〓、お爺さん助けて下さいよう。ねえ、お空のお月様、そんな所でみてゐないで僕を助けてよう。」

月「人のものをとる様な悪い子は助けて上げる事なんか出来ませんよ。悪い事をするとね、神様はちやんと見ていらつしや

るんですからね。」

狸「いゝよ、助けてくれない様なお月様なんか引込んじやへ。お月様の意地悪。

(お月様だん〓下る)

あーア遂々引込んぢやつた。つまらないなあ。誰か助けてくれなにかなあ。痛い〓。

(お日様、お月様より少し横から出て来る。)

あつ、お日様だ。お日様〓、僕を助けて頂戴。このわなからはづして下さい。」

日「お前はいたづらをしたんだね。お前の様ないたづら者はさうやつて痛がつてゐるがよい。わしはね。正しい者は助けるけれど、いたづら者は助ける事は出来ないよ。」

(お爺さん右より出て来る)

爺「いたづら狸奴、遂々わなににかゝつたな。され〓一つ家に持つて歸つて今夜はおいしい狸汗にでもして食べるとしようか。」

狸「お爺さん、もうしませんから、どうか許して下さい。」

爺「だめ〓。お前のいふ事なんか聞けないよ。され、どつこいしよ。」

(右に引つ張つて行く)

幕

第二場 お爺さんの家

背景、田舎家の土間
登場人形

お爺さん、お婆さん 狸

兎 白兎に赤い袖無を着せる。

——幕あく——

舞臺中央に狸が吊されてゐる。下手にうすがありお婆さんは杵を持つて用意してゐる。

婆 「お爺さん、今日は丁度お祭りだし、一

つお餅でもつきませうかね」

爺 「うん、それに今日は狸汁の御馳走もあるし、どれ〜わしは、一つ山に行つて柴を刈つて来るとしようか。」

婆 「ぢや、私はうんとおいしいのを作つて置きますよ。いつていらつしやい。」

爺 「右に入りかけて、行つて来るよ。狸奴を逃がさない様にしなさいよ。」

婆 「はい〜。」

(お爺さん右に退場、お婆さん餅を揚ぎ始める。)

婆 「ベツタン〜お餅つき、今日はお祭りお餅つき、ベツタンおいしく作りませう。ベツタン〜ベツタンコ。」

あーア、くたびれた、年を取ると直ぐに腰が痛くなつて、腰を伸ばして、又揚ぎ始め。」

ベツタン〜ベツタンコ。

(狸上から聲をかける)

狸 「お婆さん〜」

婆 「ベツタン〜ベツタンコ」

狸 「お婆さん〜」

婆 「遠りを見廻し乍ら誰だえ、私を呼んでゐるのはい」

狸 「おばあさん、私ですよ、狸ですよ。あのね、お願ひだから少し此の繩をゆるめて下さいませんか。痛くて〜たまらないんです。」

婆 「だめ〜、私はお爺さんにちやんと言

ひつかつてゐるんですからね。それに此のお餅を早く搗いてしまはなければ、ほら、ベツタン〜」

狸 「おばあさん、お疲れでせう。僕が一寸の間お手傳ひをさせよう。僕ね、本當に悪かつたと思つてゐるんですから、ほんの一寸、一寸の間でいゝんですから此の繩を解いて下さいませんか。」

婆 「さうかい。本當に手傳つておくれかい。ぢやね、お爺さんには内緒でほんの一寸丈ほど上げて上げよう。どれ〜(杵を置いて右に行き繩を戻し狸は丁度臼の後あたりへ

下りる。さあ解いてあげよう。本當に手傳つてくれるんだね。仲々ほごけない。(こいひ杵を紐を解き其の間に狸の後から手を入れる) ほら解けたよ。」

狸 「(手をうーんと伸して) あーア痛かつた。お婆さんどうもありがたう。」

婆 「ぢやあ私は一寸休んで来ますからね。

あゝくたびれた。(右に入りかける)」

狸 「此の杵で搗くんですね」

婆 「あゝそうだよ。ぢや頼みますよ。」(右に入りかける) 狸が杵で打つ)

狸 「此のばゝあ奴。よくも僕を痛い目に會はせたな。お手傳ひなんかしてやるもんか。」

あゝひどい目に會つた。お爺さんの歸つて来ない中に早くお山に歸らう。

(狸方に入る。暫くして兎方から出て来る。)

婆 「ウーン〜」

兎 「今日は、お爺さん、お婆さん、今日は。

おや、お二人共お留守かしら。あつ彼處に倒れてゐるのはお婆さんぢやないかしら。(お婆さんの傍へ行き、お婆さん〜兎ですよ。おばあさん誰です、こんな事をしたのは。)

兎「此は澤山ぬらないとだめなんですよ。もつとぬつて上げませう。」

狸「もつとですか。痛いなあ〜」

兎「よいしよ〜、もつと〜ぬりますよ。」

狸「あつ……此はたまらない、もう澤山ですよ。」

(逃げ込む)

兎「や〜い〜」

第五場 舟

背景 濱邊

登場人形 狸、兎

幕あく

舞臺前面に波が出て岸り右の方が一寸濱邊になつてゐる。濱邊には東が木と泥の舟を作つてゐる様子。舟は下に持つ所が着いてゐて其を下から動かす仕掛になつてゐる。

兎「あゝ漸く出来たな、早く狸が来るといいな。」

狸「兎さん今日は、面白さうだね。何を作つてゐるの。」

兎「あゝ狸さん、今日はね狸さんと舟遊びをしようと思つて今朝から一生懸命に作つてゐたんだよ。丁度いゝ所だ。やつと

出来たから乗らないかい。」

狸「え、乗つてもいゝの？ 嬉しいなあ。」

兎「ちや僕は此の舟に乗るよ。(木の舟に乗る) 狸さんは其方の舟にお乗りよ。」

狸「うん、此かい、いゝお舟だねえ。」(泥の舟に乗る。兎狸、波の上に出る。)

兎「向ふの島までどつちが早いか競争しようよ。」

狸「よし」

(二人 ギッチラコ〜 狸の舟は泥の舟、兎の舟は木の舟、ギッチラコ〜 歌ふ)

狸「兎さん、何だか此の舟沈んでゆくみたいだよ。」

兎「そんな事ないよ。僕が一生懸命作つたんだもの。さあ急がう。」

(二人、ギッチラコ〜)

狸「あつ、水が入つて来た。あつ、舟が沈む。兎さん助けて〜。」

春を待つ

春を待つ子供達の心は、昔も今も變らな

兎「あは……狸さん、君はおぢいさんの畑のものを食べたり、おばあさんをひどい目に會はせたりしたね、今日は思ひきり苦めて仇を討つてやつたんだよ。」

(その間狸は云つてゐる)

狸「兎さんごめんさい、僕もうこれから決して悪い事をしませんがどうぞ助けて……アツ〜」

兎「本當にしないね。それなら此に掘つて僕の舟にお乗りよ。」(狸權に掘つて舟に乗る)

狸「あゝ良かった。兎さん本當にごめんさいね。僕ね此からおぢいさん家に謝りに行くよ。一緒に行つて呉れる？」

兎「あゝ、それちや一緒に行かう。此からは皆で仲よくしようね。ちや早く歸らう。あ、よかつた。」

(二人ギッチラコ〜 元の濱邊に戻る中に幕)

(筆者 附屬幼稚園保母)

志村貞子

い。荒鷲として羽搏く日の夢は昔の子供達